

臨春閣

障壁画のみどころ

臨春閣は、壁や襖が狩野派の名だたる絵師による作品で彩られています。部屋ごとに異なる障壁画は障壁画は、風格と華やぎのある空間を印象付けます。

※現在室内に収められているのはコロタイプ印刷による複製画です。本物は保存と安全のため三溪記念館に収蔵されており、展示室で順番に展示しています。

浪華の間

伝狩野永徳「芦雁図」

芦の生い茂る中に集う雁を描いた図。ただし移築前（八州軒時代）にこの部屋には大木の桜が中心に描かれた濃絵（だみえ）が収まっており、現在の襖絵は原三溪の好みにより改められたものです。部屋名の「浪華の間」が欄間に収められた「浪華十詠」に因むことに併せて浪華にゆかりのある「芦」を描いた芦雁図が選ばれたとも、旧天瑞寺寿塔覆堂の傍らに桜が植えられていたことから、屋内の眺望を意識し、実際の桜と絵の桜の重複を避けるために変更したとも考えられています。

作者と伝わる狩野永徳（1543-1590）は安土桃山時代の絵師で、狩野派の棟梁として織田信長、豊臣秀吉という天下人に仕え、安土城・聚楽第・大坂城などの障壁画を制作しました。

住之江の間

伝狩野山楽「浜松図」

川面義雄「浜松図」

「浜松図」は海辺の松林の風景を描いた名所絵で、室町時代のやまと絵の画題として盛んに用いられました。床の間側の障壁画の作者と伝わるのは狩野山楽（1559-1635）。浪華の間境の襖絵は芦雁図に改められた際に原三溪により設えられたもので、川面義雄（1880-1963）により床の間側の意匠に合わせて作成されました。川面義雄は東京美術学校卒の版画復刻の技術者。明治41年審美書院に入社し、「東洋美術大観」（大正7年7月全巻完成）を初め、同書院発行の古美術書16種の着色木版の製作に従事しました。大正12年頃、原三溪所蔵の名宝の複製模写を行っています。

天楽の間

狩野安信「四季山水図」

隣室の「山水図」に比すると繊細な風景、柔らかな筆運びで描かれた水墨画。数寄屋のおやかな風情のある床の間とも良く似合います。狩野安信（1613-1685）は狩野探幽の弟で、狩野宗家の中橋狩野家の祖。

次の間

雲澤等悦「山水図」

雄々しい枝ぶりの松、荒々しい岩肌を持つ山にたたずむ寺院、湖に浮かぶ帆船。深山幽谷を思わせる景を、荒々しく、時に繊細な筆運びで描いた水墨画です。雲澤等悦（三谷等悦と同一とする説もあり・?-1675）は久留米藩の御用絵師として活躍した人物。雪舟の流れをくむ雲谷派に属する。

繫の間

伝狩野山楽「板絵十二支図額」

時代装束をまとった十二支が杉の板に描かれています。作者と伝わる狩野山楽（1559-1635）は武士の家系に生まれた画家で、豊臣秀吉に重用され豊臣家の関係の諸作事に関わりました。江戸幕府の時代に改まって以降は京都に留まり、後に江戸狩野に対して「京狩野」と呼ばれる一派の活動の基盤を作りました。

花鳥の間

狩野探幽「四季花鳥図」

四季の花木の風景に、大小の鳥が彩りを添えています。狩野探幽（1602-1674）は若くして江戸幕府に仕える御用絵師となった早熟の天才。江戸城・二条城など公儀のほか、大徳寺などの有力寺院の障壁画も制作しました。

瀟湘の間

狩野常信「瀟湘八景図」

瀟湘八景は中国の山水画の伝統的な画題で、中国の瀟湘地方の8つの名所を描いたものです。狩野常信（1636-1713）は江戸時代前期の江戸幕府に仕えた御用絵師。子に後を継いだ長男・周信、別に浜町狩野家を興した次男・岑信、さらにそれを継いだ甫信がいる。

鶴の間

狩野周信「鶴図」

松竹梅の中に戯れる鶴たちが描かれています。狩野周信（1660-1728）は江戸幕府に仕えた御用絵師で、最も格式の高い奥絵師4家のひとつ木挽町狩野家の3代目。

琴棋書画の間

狩野探幽「琴棋書画図」

「琴棋書画」とは古来、中国で高士（こうし）の風流ごととして尊ばれた嗜みのこと。「琴」は楽器を奏でること、「棋」は囲碁の遊び、「書」は文学や書を嗜むこと、「画」は絵画鑑賞や画業を示しています。横幅の広い壁面と4面の襖に4種類の場面が描かれており、残り3面の襖は別作品を持ってきたと考えられています。作者は狩野探幽（1602-1674）。

